

小島なお

●10月選評

・まちりこ（埼玉県）

冬服は夏服よりも  
正しくて

灯油の匂いのする美術室

制服は重ければ重いほど社会的「正しさ」に近づく装いといえる。芸術は社会に抗する手段だけれど、制服で、学校で、美術を習うことの矛盾をどうすればいい。

・豊富 瑞歩（茨城県）

たこ焼きが並ぶパックの宇宙感  
ぬけがら星でも生きていきたいよ

プラスチックパックに透けて並ぶたこ焼きは、球体に形成した小麦粉のなかに海の蛸を入れる食べ物。たこ焼きみたいな地球で、とりあえず生き延びてみる。

・小林紅石（埼玉県）

老人に席を譲った木曜日  
アスファルト下に金の斧あり

現代版「金の斧、銀の斧」。しかし斧は私のものでない、と伝える相手がいないのなら。失った私の席は無事週末までに戻ってくるのだろうか。

・あお（奈良県）

内定は花野にあるつて聞きました

花野は秋の季語。私たちが欲しくてたまらない内定は、春を過ぎ、夏を耐えた先にあるのだと伝え聞いて、ここまで来たのですが。

・田崎森太（東京都）

この秋の眼（まなこ）に  
時間が映らない

そもそも秋の眼に映るものがほんとうにあるのかどうか。信号機も、カーブミラーも、車窓もみな秋になれば眼になる。秋はとくに時間を失いやすい。

・火鯨研（熊本県）

若者が楽器を売るか迷うとき  
世界で揺れる万のブランコ

やむにやまれず。その苦しみと迷いが磁場となつて世界中のブランコを揺らす。楽器とたましいはひとつ。いちどお金に換えるともう音はでなくなる。

・宮本 浩（兵庫県）

ふたがない耳ふたつある虫選び

虫の鳴き声の優劣を競うために虫を選ぶ。それは古代からつづく人間のあそび。ふたがないから千年も同じ遊びに興ずることができるのかもしれない。

・藤田 ゆきまち（三重県）

秋晴をいいじやん  
コインランドリー

「秋晴は」でもなく「秋晴が」でもない「を」のこの感覚。秋晴という空間や、そこにある滞空時間を思わせながら、コインランドリーの銀が回り続ける。

・真島しましま（千葉県）

カフェオレを  
取つて生まれ  
た空間に

アルバイトの手で  
並べられる僕

手前のカフェオレ一個分の隙間に、カフェオレの代替として、あるいはカフェオ  
レそのものとして陳列される僕。資本主義では金銭にならない空間は罪だ。

・松の梢（大阪府）

信号の無い道通るバスの中  
新品の昔を感じ取つた

なつかしい未来が存在するように、昔が未来からやつてくることだつてある。バ  
スのなかで作用している慣性の法則は、「今」がずっと続くよう願う力のこと。